

[書評]

『今どきの日本語—変わることば・変わらないことば』

(遠藤織枝編、ひつじ書房、2018年)

銭坪 玲子

本書（初版第一刷、236pp.）は、「シリーズ日本語を知る・楽しむ」の第一弾『古文を楽しく読むために』（福田孝 2015）に続く第二弾として刊行されたものである。また、ページを開けば、現代日本語研究会による『談話資料 日常生活のことば』（2016）の付属資料から引用されている発話・会話例が随所に見られ、『談話資料』の続編ともいえることがわかる。前著は13編の論文に加え、談話の文字化データがCD-ROMとして付属されており、研究者向けの体裁をとっていたが、それとは対照的に、本書はタイトルも内容も親しみやすく、一般の読者も比較的手に取りやすい仕上がりになっている。

内容は、「ことば編」と「コミュニケーション編」の2つに大きく分かれており、全12章と「はじめに」から構成されている。「江戸時代から生きてきた『やばい』の今」、「『この本、おもしろいって言うか』という心理」等、各章のタイトルも読者の関心を引き立てるような工夫がなされており、語り口も丁寧体（です、ます体）で軽やかで、巻末の「参考文献」も章ごとに数冊示されている程度である。とはいえ、巻末には「索引」も掲載されており、エッセイ本としての趣をまとった学びへの誘いの書籍だといえる。初学者の学習の動機付けにふさわしい本である。

ここでは、ジェンダー関連のものに限定して、内容を少し紹介したい。まず、第5章『夫婦のことば』ちよつとのぞき見』（小林美恵子）、第7章「消えた?! 日常会話の性差・世代差」（本田明子）では、夫婦の会話であっても男女の「非対称性」が見られる（敬語や文体、文末形式、命令・依頼のしかた等において女性のみに見られる傾向がある）はずだろう、という仮説は否定されている。①発話数は夫婦間でほぼ同数、②丁寧体の発話については

妻・夫ともにほとんどない(夫の方が使用回数が多い)、③敬語については妻の使用が若干多いものの夫婦間ではほとんど使われない(謙譲語のみ出現しているが、これには「いただきます」のような挨拶語も含む)、④文末形式(終助詞)については、男性専用の終助詞といわれるもの(「(から/だ)な」「(だ)ぞ」「か(い)」、女性専用の終助詞といわれるもの(「(な)の」「(だ)わ」「かしら」)の使用において性差は見られない、⑤命令・依頼の表現(夫は命令形、妻は依頼形)についても性差による違いはない、⑥夫婦の呼び方(呼称)についても性差による違いはない(40代の前後で呼び方に世代差はある)、以上のような点が明らかになったという。また、⑦「食う」や「飯(めし)」、「来ねえ」「入んねえ」のようなことばの使い方は夫のみにみられた、とはいえ、結論としては、世代を越えた「ことばの中性化」の傾向が見られ、「夫婦はそれぞれの工夫と個性で快適なコミュニケーションを図っている」(遠藤:p. 81)と指摘されている。言い換えれば、映画などにみられる「役割語」(金水敏『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店、2003)としての「男ことば」「女ことば」は、実際の日常会話ではほとんど用いられず、それぞれの場面で、各話者がスピーチスタイルのシフト等のストラテジーを巧みに用いながらコミュニケーションを行っているという実相が明らかにされているのである。第7章「消えた?! 日常会話の性差・世代差」(本田明子)においては、「談話資料」を分析した結果、夫婦間の会話に限らず、性別によることばの違いはほとんど見られなかった、という報告がなされている。つまり、現代日本語による会話において、夫あるいは妻、性別、各世代に特徴的な傾向はない、というわけである。

本書及び前著の『談話資料』を手がけた現代日本語研究会は、1997年に『女性のことば 職場編』(1997)を上梓している。実は、既にこの書籍において、自然談話の分析・研究からいえば、女性は「女性のことば」を話すものだ、という当時の「常識」が実は事実とは異なり、単なるステレオタイプにすぎないということが明らかにされている。ジェンダー研究にとっても、現代日本語研究にとっても、この研究成果は大きな功績であったことは間違いない。そればかりか、同様のステレオタイプが依然として根強く残っているとされる現代においても、本書で試みられているように、若い世代の学

生たちや言語に関心をもつ一般的な読者に向けて、この事実をわかりやすい表現で伝えることには大きな意義があると思われる。とはいえ、正直に言えば、この画期的研究成果が発表されてから20年後の今現在の私たちが、実際の女性は「女性のことば」をほとんど使わない、という20年前に「発掘」された事実をただ単に繰り返すことに満足してはいけないうろうという思いもある。現実を知ることは、偏見のない、多様性を尊重した社会を実現するための最初のステップであったとしても、である。

現代日本語研究会は今から約40年前の1977年に発足し、これまで活動を続けている。当時は女性研究者も少なく、現代日本語を対象とする研究会も研究者もほとんど皆無という状況であったという。そのような中、大学の非常勤講師やジャーナリストなど女性7人が集まり、研究会を立ち上げ、1980年に研究誌『ことば』を創刊して以降、毎年の発刊を継続してきた。その他、上述の『談話資料』や『女性のことば 職場編』等、多くの書籍を世に送り出してきた。これらの業績を支えているのは研究会会員に通底する共通の問題意識や明確な目的意識であったに違いない。先達たちが築き上げてきたこれらの業績の上に、今の私たちは何を積み上げることができるだろうか。本書から与えられた示唆をもとに、今後目指すべき研究の行方について、いくつか私見を述べたい。

まず、現代日本社会や女性研究者を取り巻く状況である。日本は先進諸国の中でも女性の社会的地位が低いことで悪名高い。世界経済フォーラム（World Economic Forum）の“The Global Gender Gap Report 2017”によれば、各国における男女格差を測るジェンダー・ギャップ指数（Gender Gap Index: GGI）において、日本は144か国中114位である。前年より順位を下げていることがメディアでも大きな話題となった。とりわけ政治参画と経済参画の分野における男女間の格差が大きいことが指摘されている。現代日本社会の女性は構造的不均衡の中におかれていることが明らかである今日、男女のことばに違いがないことを繰り返し指摘するだけでは不十分であろう。仮に、男女のことばに違いがなく、「ことばの中性化」が進展しているのが事実であったとしても、一方で、依然として低い地位におかれている日本女性の存在を、ことばの研究者はどのように研究・分析するのであろうか。ことばの性差の有無

やその誕生から消滅に至るまでの経緯、ことばの性差が包含する潜在的・顕在的機能等について、より詳細な考察を加えることこそが私たちに求められているのではないか。「役割語」とは、「〈標準語〉とその偏差によって階層化された体系」である「ヴァーチャル日本語」（金水：前掲書、p. 203）を構成する要素の一つであるからこそ、「ヴァーチャル」である日本語というシステムにおける「女ことば」について、今後より深く解明がなされるべきではないだろうか。いわゆる「標準語」とは、近代国民国家という「想像の共同体」（ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行——』、1997）に必須のアイテムとして生み出された近代的産物にすぎないこと、また、多くの「伝統」は近代以降に意図的に創られたものであること（エリック・ホブズボウム『創られた伝統』、1992）は、1980年代以降のポストモダンの潮流のなかで人口に膾炙した社会科学的知見である。「役割語」という概念もまた、「ステレオタイプ」という社会科学分野においては基本概念ともいえるものが言語学に導入されたことによって誕生し（金水：前掲書、p. 224）、その後、言語研究者に広く受け入れられるようになったものである。縦割り式の専門領域に固執することなく、分野横断的な研究を積極的に試み、隣接する専門領域からの示唆に富む先行研究を活用した研究に取り組むことによって、ことばとジェンダーの研究はさらなる飛躍を遂げるに違いない。

例えば、言語教育に関する領域では、性別等の不均衡が現に存在する社会の言語を習得・教育する過程において、実際の言語の違いや社会・文化の「ありのまま（の不均衡な状態）」を学習者が獲得したり教育者が提供したりすべきか否か、という大きなアジェンダがある。これを解明するためには、分野横断的な研究が欠かせないだろう。日本語教育においても、日本語母語話者ならだれでも知っていると言われる「女ことば」などの「役割語」を学習者に教えるべきか否か、は未解決の課題の一つである。実際の女性が使わないから教えなくてもいいのか、使用語彙ではなく理解語彙として習得・教育すべきか否か等、今後も検討が続けられることであろう。より有意義な議論へ導くためには、言語学や言語教育の周辺分野の知識を応用、活用することが不可欠である。

次に、研究方法と研究成果の公開についてである。飛躍的な技術革新により、近年、会話研究も大きな変化をとげている。好井によれば、現在のエスノメソドロジー研究では、会話録音による会話分析ではなく、映像を文字化するという相互行為分析が主流だという。そこでは、「分析者」あるいは「分析する」という行為さえも自明なものではなくなり、会話分析は実証主義的分析としてではなく、解釈学的な「解読」と見なされる。抽出される「自然会話」すらも、分析者のある種の解釈に基づいた選択の一つにすぎないのである（好井裕明「会話分析」『現代社会学事典』、2012、p. 162）。談話研究が求め続けてきた「自然談話」「自然会話」は、何が「自然」かというポストモダンの問いかけによって、もはや成立し得ないものとなってしまったのかもしれない。少なくとも、会話分析をする研究者はそのことに自覚的にならざるを得ない時代を迎えているといえるだろう。さらには、研究成果をインターネット等で公開・共有することにより、研究の飛躍的な発展を期待することが可能な時代にもなっている。データや研究成果をオープンアクセス化したり、自由に再利用することを推進したりすることが現実におこなわれている（宇佐美まゆみ（監修）、BTSJ 日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）2018年版、2018など）。所有する時代から共有（シェア）する時代へ、といわれる今日、研究方法や研究成果の公開のあり方も近い将来変化するに違いない。

社会構築主義的研究やポストモダンのインパクトを既に経験し、技術革新が急速に進展する現代に生きる私たちは、数十年前に画期的だった取り組みや成果を遺産として引き継ぎ、当時の研究者たちと同じ志を抱きつつも、時代の変化とともに、改めるべき点は改めながら、さらに前へと進んでいかねばなるまい。「研究して論文を書いておしまいというのではなく、その結果を社会に戻したい」（遠藤：pp. v-vi）という編者のことばに襟を正す思いがする。

この書評を書くにあたり、数多くの先達たちの勇気や努力の積み重ねの上に今の私たちがあることに思いを馳せ、研究者として研究成果を社会に還元していくこと、さらに若い世代にこのたすきをつなげていくことの大切さを

改めて痛感した。このような機会を与えられたことに感謝したい。

(ぜにつぼ さちこ・長崎ウエスレヤン大学准教授)